中村俊定文庫
文庫 18
376

秋田藩

近衛殿のひとり言

御書ものゝ時日は其時やうに
くちなしの葉の
花乃和井いろ和世世
かゝるも心ゆるる事
柳先師無を去給ひしより門人

假定藏

漁戸は橋ばしらを山路に拔て
ゆふ煙たゆるきのふの香とて
こゝ第十番作り三つの
圓屋をいかり結ひ無量壽佛を
作むかうより雲母を懸く
羅漢は蓮の葉を敷ふ乃佛と
その世まで思ひぬいて

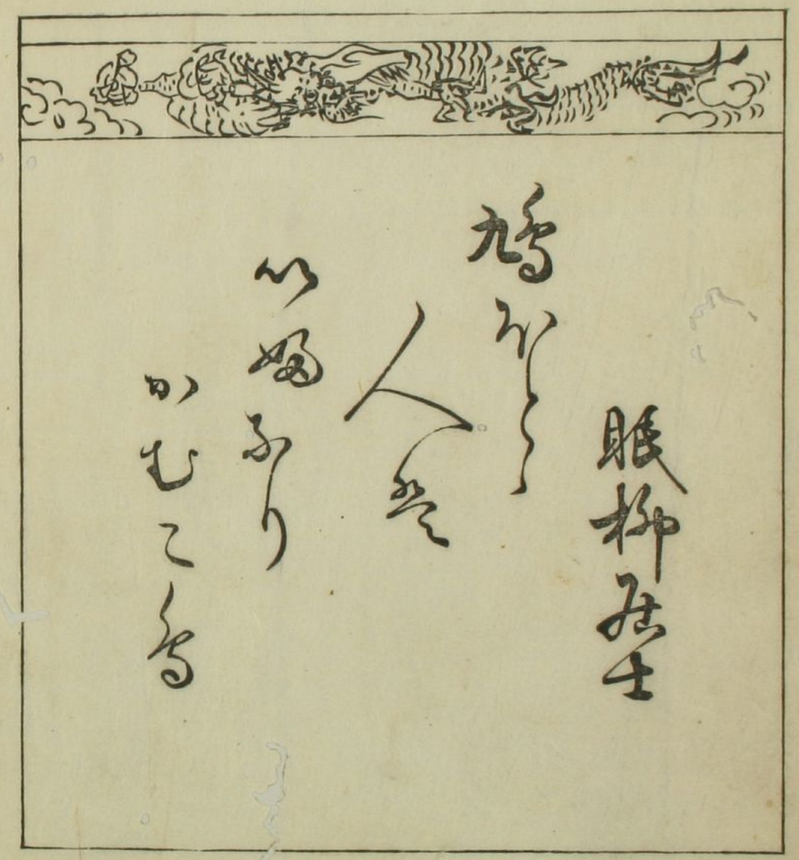
[illegible]四の一句詠吐けるかゝる作
う迄ちかよ俗く歌仙の表よい
海り者り四方吉品四方人くを
さゝあて和ゝかるまゝ延福
のに[illegible]人事をかりゝと居ち
使ちつくゝ者教を詠して我のす
ゆゝ[illegible]はかりゝ文通よ哭し

白しを四季とすくかん集て
かれ六しの事ども毎　霊位の
うしろ　ゆ　ゆるるまいりす毎
ちれを琴みゆ　ゆを詩し　友の交り
みを　寄りて　生前より好む所道の
不絶を　人の　ゆるとなせるのを
うゆを　しの　撮　しるを貴ぶ

方寸を叱しを　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
あ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

此飛富山亭

老梅



宮城県図書館

去一章八句之後の作とおぼしく文政
九年ごろ十三章の
前まで八句如此なれ共
文臺に添ひ侍る
なれいますこしくわかるべく

老梅

反魂ふもとれ如蓮や出の雪　何梢

春くくちの紀行乃涼風　茅亦

次韻同人見梅八句和基を近て　柳幔

庵へまゐらさ下駄尋ね　柳幔

中村保定文庫

元山下に恐らく遠目表の
海と称して所々川辺
節供に菊を移す戸のいとうら
部屋にて物語る内義
彼の部屋に入れ所々と呼く
月の日後の亭に出でし乃
月雪花大方流れ寂たり
水菜を塩ハいつの世此智恵

富井
鬼篠
梅賦
素
幽
梅
嫁
城

拙風呂小蓋にて
機下物を入てゑん
こも信仰出雲国を江乃鉢ふ
新加嶋む張縁の所並
義なる花乃表ゝ書の
吸物に仕よ 出る
魂泉ゝく歩りゝ
橋下いく色を拭乃用

梢
井
梅
幽
梢
城
井
嫁

ほろ〳〵ハ弓も卯月の空ぬ俳　素

菱の芽ふとうけ如意やう　梢

院葬まゝ行燈ともて　赤城

暖簾を首ふまゝ　井

面りゝ仏ゝと服をかゝ巴せ　妹

ゝくゝ惜うたゝ川ふ　梅

麦蒔の里もわつまゝ　素

笛を通鐸ふ　俳

人をとゝ暑ぬのゝ宵乃月　城

都ちゝくの妹ゝかゝ亀ゝ　井

紅葉を賛ゝも白ん寺の飯　梅

矢を立へやゝ来ゝ　妹

先き肩ゝ弓ゝ　梢

うゝの橋ハ探ゝも　素

梢かゝ茶も佐蓑の蛇を引　嵯

雪ぬ夜も拾ふ時　執筆

懷旧

年々の月日を経て昔話夜　古道

咲や昔さながら仏の蓮乃宗　竹外

ふる井戸ぬる水ふかつ紀面　琴堂

夏ハ冬秋かさ〳〵忘れぬ柳うれ　秋瓜

同

月日ハ流れ〳〵忘れ去ら　茶宗

ちり〳〵ちる〳〵言〳〵衣柄　柳幔

訪ハ行し桜を見やる鶯哺　柳賦

猫笠も濡れ濡れ濡れつ夏面　晃徠

とも見えぬ二すじと節雲深〳〵　密嵐

月ぬけ書くかたち玉々蓮の露　富井

紫もう〳〵紅くふ〳〵雲の峯　何楊

同

此日をも池もうつ絵や蓮の風　必推

我と夢の夏見えんうくもや合欲の茶　百的

見ぬ数に入りやしてゆのうあり花　侍南
淩霄も折をうりしる遠夜うれ　宇好
ぎりし世紙むしにたやし凡車　文湊
雪茅年迄乗乃うりく柳塩　其孫
俳句を乞ひ物ゆりのうれ　賊呼
夜さくやとけへ蓋原風の色　芳弁
さのり高茅をもむや百日紅　兎来

同　拾五夜の
十三国年及へまて
告来るに寄る俳句て

花咲ておもい知るや月やつるれ芋　麦浪

解るとかとよ流や山さくら　秋扇
枝くの一むら毎や夕雲、英　花源

いくつかれる家よ垣ゆふ菜の葉
葉虫かくれ今は業芋や埴の夢　古道
実形のうち又咲やうれ雑るう邦　弁外
富士を見る人や暑をうしろ向　琴堂
名除よ一粒まハ麦柳可通　三禾
ほとゝきす啼く乾す畳も寒　老梅
自新を言ふもこゝろ樹うれ　南川
内みて拭て畳も遠き茅の庵　童牛
　　　　　　　　　　　　　楓人

氣の毒亭主とつんぐる柳うれ　時来
葉の陰ハ寒し　寒の月　白釣
ふ雪に明建のあれ柳うな　仙泉
文神や田もらうほたおろ月　弁涼
降ゝ砕乃知く寒紅葉　三巴
越別ゝ川のうて踊し　月　竹窓
就ゝ　て扉ふ抜よりぬ梅の芳　深仙
扉ゝ寒ぬ文ゝ　ゝくきりくを　大深

山ずとくうるこ出しりうきのこ　物　湖鮮
初雪や出る夜すまを夏よ多新　花明
筆墨硯机なをやすを見乃茶　休石
鶏夜の長くまハ多やを　くすり　大室
雪踏枝ゆを春ハ月　雪の那　多碎
末のなくハ多紙雪遠　一世さう　湯月
雲ハみれ地ず接拓　一ち月乃氏　魚明
ちるをとも名多ふて夏乃わう　楓　竹斤

結合ずきく掘婚川神一金　五湖
四月今や多ず八自然ず新　春陽
山畑や作ゆ四月ず神さく　志梅
時雨のう寺乃みしうを高氣式　新紅
結ず女たのまを紙ず　こう那　葉光
極側ず破ずをの鉢やかをつを　五蛍
四時波ちうまちても異　のれ　古道
結人ハ寺乃ゆずをきず　風夕

末賊へハいりてたゝかふこと
五度や二ふの世の事ハ指ていせる
事なり　欲する所ハ
遠国ハ吹聚さるべし　聖人の邦
和らこの方を慶賀
代士乃事や破れ
牡丹ゆきやうやう　市の
初汐や松の　無別　板

柔志
柳怪
弁外
玉芳
魚咏
花渓
京浄
花果

永既乃家をたゝき梅や内ゆきを面
新兵衛側より筆　月見の邦
桑嶋乃ちとゝ　ゝ　さ可南
村角や　鞍ハ　ゝ　ゝ　ゝ
梅ゆや　乃　ゝ　ゝ　ゝ
行ぬけ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
白ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
賊　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

秋氏
女　宗人
紅梢
海波
抱雲
琴壺
馬十
東洲

梅花　志賀

海地蓬萊仙人や神仙の遊

梅嶺

あるとの森のもとに秋霖を見る樓閣

冬嶺

曙さらぬ松のふるゆきの雨

惠嵐

賊ゝ也如風ゝ腹ゝ川中のきぬ

富井

壞ゝ多て妻に仰ぐ日や菊の酒

芦江

院番に拜ゝ日や菊ゝ酒ゝ

四象

松むしや唐土の百ちゝ八百ゝ

鳳吹

幕間ゝ業八ゝ多ゝ一や枇杷の葉

多洲

蚊の吸ゝ嶽にゆくゝ行ゝ秋

十義

名月や唐ゝ料ゝ亭ゝ鐘

白黑

ゝ柳や松ゝの腰ゝ立ゝ

去留

蓬ゝ寺ゝ蓬ゝ立ゝて高ゝ

多多

いかゝ書や三ゝ月ゝ樽の雫ゝ

志梅

出ゝ月や高ゝ山ゝ

宣林

面代や屋ゝ阿ゝ弥ゝ

加雀

錦織子所を知のけやゆみち物　不經
や畑入や志ゝ遠ちのおとつる　盈枝
蘇やくもかゝる風板橋の　裾　流水
川物や茅葺屋を踏て　り　橋下
棉ゝりや川てゝゝんゝ猫のまく　花梅
俊史て声のちゝはくゝ色家　十起
芝居て家ゝるゝゝゝ色の雪　月明
祖父祖母の中　八畳炉裏や麻の声　つ聚

相の茅葺蔵ゝく表を見せまより　左蒙
姉妹乃打ひの茅葺紀明るゝれ　左蒙
投入て根の坊ゝ色やかゝるゝ　文江
三日月ゝゝゝ山ゝり雲の峯　仗乗
岩て女の筆先ゝ茅葺ゝ　女　蹄月
深壁ゝの端ハ茅葺尾岩ゝ　但雨
掃ゝ行ゝて三ゝの落葉ゝ　遥志
四方ゝゝゝ裏みゝく住毛蛙ゝれ　冬湖

雑炊の葉ハ青竹の筋や秋たき　竹舟

泉よりやうく山茶花の蕾ふる　蔵之

新そばや田毎の雪も見く海鼠　立流

月かゝる竹の約束も重ねて　古道

新まくハとすこしく友の蕨　棲年

蕨や一里見くる茶さうり　糸瑞

さゝ舟さの石へ入なりそりくる　秋瓜

うゝ柳や抽てさいゝぬ雪の声　二禾

ゝゝやこゝも秋の田のみこさて　雪堂

水雪の掃ゝやく亟木乃葉ハ　老梅

四へとまゝし越さ地蓋くこゝり　左右

雨水の気ゝ春ゝ苔清ゝ　柳之

雪の清ゝ春ゝ新ゝ寄の種　泥童

陽ゝく又尾茶ハ茶ゝ神ゝ遠　丁要

夕鶴や支婦ゝて鶴の亟ゝ　雪碎

ゝゝ童や嫌へゝ春ゝ　保瓜

大和詠ハ稀ふうとゝ　棉乃花　桂溪

年に咲る菊の花や星の国　夾橋

尾張

ゑ枝を極へいけるや秋の山　支菊

三江

ゑ年待捨むと言ゝいちさ百　木鶏

四ふ三へ枝も知るやむ先乃花　百丸

駿河

ゆ〻しへの紅葉を筆や墨未うり　紅

猫乃事如臺所なりすゝ見紅　射紅

松風の中に節あれちとりの孔　竹卧

甲斐

隅家中さく口紅の花ちより　梅童

和漢

埋火中人手ゆ事ゆ事のうち　鈎音

風も地下漏れかしこく人世を経る業なれば　平柯

武蔵

業結ぶ八谷かくれもなけれの雪　宗立

あくるうら響は結ぶる見やの和し氣　民歌

色香乃いくさを隠す宗野とう南　巨山

香下ばく森ぬ事八あり子の月　八王寺春峨

稲つまや潤くし業を八樊ぶる　孤際

風のなん方うるおもくみる　花平

情まくる雪も待ち巡る初時雨　雑啄

花ぬくる梅ぬ本くゆ中まあし　戒谷吾山

麻ぬ下い年八結ぶ谷ぬ陸中の氣　小川恩泉

背中かくるもを無て大根引　井眉

宮花とく聖まへ打ぬ事ぬ氣　吉山老村

苗代やまうくる潤ぬ松の新　魚蓑

雪結ぶ下塩成這八世を聖ぬ　風雪

常陸

鶴岡や雪に沿ひて宮一町　青郊

多賀やかえ[illegible]ぬうちを多賀の座　湖巷

陸奥やいさりに乗る和泉代も　磐州

蕉翁の書を風中に語る小夏氏　蕉經

起ちわれば蕉翁の夜寒哉　耕亭

精かりて下ハ時雨なく乃ちの月　蛍風

風呂敷の宿さく蕉翁女郎花　市中

夜ちまて[illegible]と夜郭公　梓香

看經の祇かりて[illegible]踊の角　春文

身ぬ[illegible]ぬ[illegible]と[illegible]ぬ[illegible]　之六

蛛無ぬ山乃笑ぬやきのと指　赤俄

出羽

梅一本鳥の小斗や畠中　李經

讃岐

ちり[illegible]ぬ[illegible]田の連やかぬ[illegible]　畏天

[illegible]ぬ[illegible]山の尾先和多の月　楓里

[illegible]の[illegible]を[illegible]かしし式　周面

小盃を枝中のたんてかりまり　一卿

肥後

鳴中[illegible]秋の末もはりたの[illegible]　恕雅

弁の[illegible]やうくもふもとくたり　兎来

[illegible]　芳中

下[illegible]ハ[illegible]　其跡

[illegible]

[illegible]の[illegible]　千山

[illegible]　南浦

[illegible]　[illegible]

[illegible]　竹茂

[illegible]　壷山

[illegible]　鈎[illegible]

[illegible]　梧叟

[illegible]　一有

長柄の中かうの音を隣の声　朴丈
関寺の門たのもしく松陰の茶　椎砧
日の御ゝ帳を下ろしかんこどり　竹明
花橘や麹室かうの朝の宮ゝ　妙菊
むしろ干す日和よしや菜の花　嶽々
九十九の今別見る紀蛙　の姫　鳶士
築山の苔を少し重ねる風　妙栄
伊達ものすぶうす雪ハ冬し紙雛　羽白

御植ゝ禁ゝ駒ゝ駒ゝ駒の造　菜童
出ゝ伏立へ使ゝ三口ゝ新　蒙蟲
いゝゝ山ゝ近ゝ迄ゝ見る風　旧耕
菜ゝ高ゝ流ゝ井ゝ仰ゝ不　斧丁
直ゝ焼ゝ山ゝ寺ゝの月　木北
里菜ゝてゝを行ゝ生ゝ流ゝ　秋左
夕ゝ行ゝ鶏ゝ煙ゝ環ゝ住ゝ　南古
巻山ゝ麓ハ近ゝ迄ゝ　牧之

ゝまにはゝあよ[illegible]さ角や牝牛　市破
はちゝ今く人まで[illegible]ゝ　巴茅
樫[illegible]や寐たの[illegible]牛を寄ゝ　百先
むらまはたゝもゝんゝ雑子の声　与流
桃灯を見よ[illegible]村やむ[illegible]の花　村下
及の灯の一ゝんのゝ[illegible]枯野[illegible]　其十
[illegible]瓶よハ掛ゝぬ影や[illegible]星　文鏡
日の色はゝわゝく美影花野[illegible]　風篁

三日月紙一里塚ゝちとり小　宇好
埠の巣よ押合をゝや夜の面　眠峰
草にはゝく松たゝ[illegible]ゝ一夜の雨　倚南
影の[illegible]を覗やみをゝみ　芳月
[illegible]ゝ[illegible]ゝ市に夜の[illegible]　下ゝ一志
寐かゝゝよ[illegible]を信ゝ長[illegible]や星の[illegible]　古川北宇
末[illegible]ゝ空宇のかゝや白紙　今素廉

加賀

後撰八風とあるのふさくさの那　尼素圓

千載　人もとぶらはぬ山の橋　如之

ちりはてぬ花の色にぞ思ひ入る　寸童

蛍火と岩ねうちかくるるかな　麦雅

徐寺に一枝うつや雄子の鶯　為浄

州時雨青のうるかしぶ　芋帆

子金は黄声とるしかときす　猩支

未明やと渡る木よ蕾の音　祐古

炭うり姿さやるよ附ふる　茶菊

文月ちかく初秋や虫の声　里志

ゆく鈎瓶へ何ぞう部ゝ　云歩

裏を絶ふ小寺紀四うゝ風　概古

節句やと土佛ゆく金阪袋　烈歩

こも俗新歌ゝくさくさうか　士晋

人立ちのをもを干元宝の筆　和泉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松宰

有雪

素道

麦浪

跋

謙云敬孫追遠民德歸厚矣

信哉

柳居先生擅場徘徠若屯沒

十有三紀于今寥寥諸子

妙新喪日者以其志以祭其
神蓋蒿悽愴怳惚乎如中吸
唾之靜之生追遠之情可謂厚
矣　老梅君亦居門客也獨
以在官遠憂無就職在于北

飛則必蘋之薦ふ能彫琢於
是搜集諸子平日所附與嘗
札奚於秋無之新若干首倘
若一快以代生薦云　老梅
君此柔蓋亦有孝年共師之

厚也文而載而後示行者也

文

先生之号擅場千載者亦此

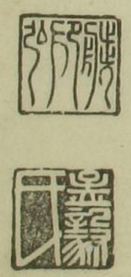
集乎所謂追遠則風格〻至

之備矣者亦不由此也乎

誠神之格且不可測思

先生〻靈之享也必矣

寶曆十庚辰歳雞賓 滕元弘謹書



寸一癖小暑高一桐の葉

京都二条寺町
橋屋治兵衛板